

京町家通信

KYOMACHIYA PRESS
vol.101

京町家通信 第101号 2015年7月1日発行
特定非営利活動法人 京町家再生研究会
一般社団法人 京町家作事組
京町家友の会
京町家情報センター
ホームページ <http://www.kyomachiya.net/>

追悼◎大谷孝彦さんのこと

大谷さんは京都大学建築学科で6年ほどの先輩でした。研究室でもお名前は良く知られていましたが、熱心な学生ではなかった私には、残念ながら大学時代の記憶はそれほどありません。お付き合いは、京都市内の設計事務所ゲンプランに入社してから始まりました。当時、ゲンプランは京都、大阪、東京に事務所があり京都事務所には12、3人ほどの所員が所狭ましと製図台を並べ、日々の設計業務に向き合っていました。大谷さんに直接教えていただく機会には直ぐにはなかったのですが、なされている仕事内容などを伺うと、判りやすく丁寧に教えていただいた記憶があります。

ゲンプランは、満野久先生を始めとする、故増田友也教授の門下生の方々が始められた設計事務所です。稲沢市庁舎や伊勢神宮社務所など数々の代表作品がありますが、当時、大谷さんは事務所の中堅として活躍されていました。多くの仕事をお一人でこなされている姿を思い出します。事務所には、個性的な人間が多く、自分のデザインをとことん追及するスタイルの先輩達が多かったのですが、共通しているのは、よりよい設計を目指し、粘り強く推敲を繰り返す姿勢でした。このような中で大谷さんは、正攻法でそれこそ粘り強く設計を進められる方でした。

当時、大谷さんは、「宝塚エデンの園」という大規模な高齢者施設に取り掛かれていました。宝塚の山手にある61,000㎡ほどの敷地は、今では周囲にマンション群が建ち並び郊外の緑豊かな住居地の風情を醸し出していますが、当時は名門ゴルフ場が並ぶ六甲山ドライブウェイから少し入った山中の敷地でした。ここに400余戸の高齢者住宅を建てるという、時代を先取りした計画だったのです。これを大谷さんが一人でスケッチをしている姿は、図面と格闘されているように見えたものでした。同年代の若手は、大谷さんの設計スタイルを独創性に欠けるとか、新しさが無いなどと好きなことを言い合っていました。地道な検討を重ねる姿勢から全体像が産み出される作業過程を私は驚きながら観ていたものです。

この高齢者住宅群の入り口部分に特養を設計することが決まり、一つ年上の先輩と担当することになりました。彼は、その後一緒に独立をし、現在の設計事務所を彼が社長、私が専務として経営することになる人物だったのです。ゲンプラン時代は、私自身も皆に負けずにものをいう若者でしたが、紳士的で誰にでも誠実な姿勢で臨まれる大谷さんには、見守るように私達を指導していただいたものです。

当時は、同僚達とよく酒を飲み建築談議をしたものです。大谷さんは、多くは飲まれなかったのですが、お酒の席はよくご一緒いただきました。奥様の実家が木屋町で御茶屋を経営されていて、私等はよく寄せてもらったものです。義母様が切り盛りされる、京都の風情を伝えるこのお店には、今思えば、迷惑を顧みずよくお邪魔したものです。人を許容する大谷さんの雰囲気、つい私達を大胆にしていたのだと思ひ出します。

さて、私自身は前出の1つ年上の先輩とゲンプランを独立するのですが、その後も大谷さんには危なっかしく見える後輩に氣遣って声を掛けていただきました。20年ほど経って、私が建築士会の会長になったときには、自分のことのように喜んでいただきました。私自身は、大谷さんには大学やゲンプランを通じて教えられた正当な設計業務しか評価されないという思い込みがあり、建築家の実務ではないと卑下する気持ちもあったのですが、最大限の評価をしていただきました。実際には幅広く建築を考え、また、人の気持ちを感じ取られる方だったと思います。

その後大谷さんは、京町家再生研究会の理事長になられ、京都の建築文化やまちづくり活動などにご活躍されました。これで、設計事務所の先輩後輩の關係に、京都で活躍する建築団体の長としての關係が加わったのです。このことにより、例えば京町家の防火の問題、景観まちづくりなどについて頼りがいのある先輩としての存在であることを再確認させられたのです。また、平成の京町家コンソーシアム副会長として、現代住宅を手がける若手の設計者に京町家の本質をよく理解することを、設計審査や設計指導などを通じて強く促されてこられたことや、その後、武庫川女子大の教授になられてからのご活躍も大谷さんの素晴らしい業績の一つであったと思います。また、大学の先輩としては、京大建築会でのお姿が強く記憶に残っています。大谷さんは、当時の会長の故横尾義貫名誉教授の信任も厚く、例会などで会長代理として良く壇上に立たれていました。

このように、職場や立場、役職が変わっても大谷さんの誠実さ、人へのやさしさは不変だったと思います。これは、きつとご家族との生活でも、同じだったと思います。ずうつと変わらなかった、心優しい大谷さんのご冥福をお祈り申し上げます。

＜衛藤 照夫 (京都府建築士会会長・株式会社ゆう建築設計専務取締役)＞

追悼 ● 建築家 大谷孝彦先輩を偲ぶ

去る6月7日午後、京町家再生研究会の二代目会長を10年間努め、今年4月に鬼籍に入られた大谷孝彦氏を偲ぶ会が催されました。京町家再生研究会が発足した1992年(平成4年)から数えて24年目を迎え、研究会誕生当初から参加された懐かしい顔ぶれや、途中から主旨に賛同して合流された方々、或いは京都の町家保存活動の同志である他会の友人や、この運動を長く見守って頂いている行政の方々が集まり、大谷夫人を囲んで、故人の思い出をそれぞれ心温まるエピソードを交えて語られ、大谷氏の人柄や再生研の歴史に残された足跡を、清々しく思い起こす事が出来ました。特ににこやかにほほえむ笑顔の大谷氏の遺影に、白いカーネーションが献花されると、まだそこから優しい声が聞こえてきそうな気がしました。集まった方々の心の中にも、この数十年の時の流れを超えて、懐かしく優しい面影がすぐ傍らに忍び寄ったような感覚に満たされたことと思います。

大谷氏は、京大の建築科で3年先輩にあたり、温厚実直で人望のあついででしたが、事、建築については、熱い情熱を持った方だと感じていました。特に増田友也教授のゼミから、設計事務所ゲンプランで仕事をされたので、鉄筋コンクリート造の公共建築を数多く手がけられました。私は全ての作品は存じ上げませんが、御本人に案内して戴いたコンクリート打ち放しの小学校を見学して、生徒や先生達に優しい木質系の材料がうまく溶け込むように造られた作品が、先輩の人柄とマッチして、非常に良質な気品を漂わせておりました。

長年、同設計事務所の仕事が続けられた後年、私達は再生研創立時に再び出会う事になりました。私には、当時京都の歴史的文化都市の実体として存続する町家を保全再生する事が、市民や私達建築の実務に携わる者の、急務の目標であり、建築家としての社会的責務だと思っていました。行政にいらした望月秀祐初代会長は、京都の近代化の為に力を注いでこられた後で、ようやく都市計画的なレベルで町家街区の伝統的建築物の保存再生にかかわる事に意義を感じておられました。再生研創立時に参加された横尾義貫先生、堀内三郎先生、堀江悟郎先生の三名誉教授もそれぞれの立場で再生研顧問として、戦後の日本近代化の先に見放され、解体されてゆく伝統木造建築の復活を望んでおられました。それと同時に、同様の必然性を共感した当時の若手研究者の皆様が、こぞって参加してくれる事により、再生研究会はスタートしました。

その研究会の初期の活動の中で、大谷さんの業績は、橋弁慶山町会所の再生計画を担当された事です。その顛末は京町家通信創刊号に御本人が事細かに記述されています。偲ぶ会でもそのコピーが参加者に配られ、懐かしく読ませて貰いました。私は当時研究会の世話役をしていたので、橋弁慶山保存会の平井佐太郎、片山文雄両氏や、テナントの和座百衆の黒竹節人氏、そして工事を担当したミラノ工務店の木村俊雄氏や職人達と御一緒に協議に加わりました。特に町会所を5m引き家して、既存不適格建築物のまま、用途を存続させながら、山を収蔵する土蔵と会所の間にギャラリーを別棟増築

する計画は、難問山積みで、良く達成出来たと感心しています。関係した皆様の協力体勢が、緊密かつスムーズに働いた事が大きな成果に繋がりました。

大谷さんは、ゲンプランの若い設計者達と一緒に、京町家の格子や意匠を細かく採寸したり、架構の痕跡調査をして、会所の建築当初の姿を復元し、新しい再生プログラムとの関係を解くのを、興味津々熱心に取り組んでおられました。その中で、京都大学建築史研究室が川上貢先生の御指導で行った、祇園祭山鉾町会所の研究から学ぶ所が大きく、研究会に高橋康夫先生や、谷直樹先生を招いて、京町家と祭りについて歴史的考察を加えながら実践出来たことが何よりでした。この京都の中心町家街区である山鉾町の文化的景観の認識や、その保存継承については、未だに研究会が追求し続けているテーマでもあります。橋弁慶山町会所の増築部では、延焼の恐れのある部分の防火措置が大切な研究テーマの一つでありました。この当時は、建物の軒裏外壁を防火構造に塗り込めると共に、開口部はスチールサッシに網入りガラスを嵌める事で、建築基準法をクリアする事にしました。しかしながら、当然この解決法は、京町家の美様式に対して目をつぶり基準法に目を向けたダブルスタンダードな解決を示しただけで、本質的にはこのテンコツな重々しい防火戸や、構造用合板を用いた防火手法には、反対意見もありました。その為、京都市主催の「町家再生のための防火手法研究会」に参加し、後年その成果である「水幕防火手法」を橋弁慶山町会所に取付実験をしています。堀内三郎先生が主唱された京町家の裸木造の美様式を、準防火地区内に存続させる為の画期的な研究であったと思われます。この研究も阪神大震災の前後をまたいで、再生研の継続する研究テーマとして受け継いでおります。

町家の構造については、大谷さんは、伝統的町家の構造美を大いに評価しながら、科学的定量実験に裏打ちされた、構造計算書に依拠する方法の間で悩まれた事と思います。阪神大震災から20年を隔てて、今やと京都市では、伝統木造構法を基準法の枠組みから外す条例が出来、本来の京町家再生への道が拓かれつつあると考えております。大谷さんも参加された京町家作事組では、日々その実践をしています。震災前の大谷さんが町家再生に取り組まれた時点では、二律背反の時代であり、常に研究会内部でも議論が沸騰していました。私は、建築家の良心を持って、この難しい時代の京町家再生に取り組み、京都で活動する諸団体の中で、常に協調の精神を唱え、更に全国町家再生交流会を立ち上げ、活動の幅を拓けて行かれた先輩の勇氣に、敬意を表する次第です。

町家再生の道程は遠く、先輩諸氏の努力を引き継ぐ我々の後に、更に若い世代が道を歩んでくれる事を願っています。大谷先輩、持ち前の優しい心で、いつまでも京町家再生運動の行く末を御見守り下さい。

<木下龍一(京町家再生研究会理事)>

追悼◎前理事長大谷孝彦氏の遺志を継いで

4月4日、前理事長大谷孝彦氏がお亡くなりになりました。京町家再生研究会ができて23年、望月会長、大谷理事長と10年ごとに代表者を交代するという節目をこえたところででした。これからは大所高所でご意見をいただけるものと思っただけに、大変残念な気持ちで一杯です。

京町家再生研究会として初めての取組となった「橋弁慶山町会所」の再生設計をご担当になり、その経緯は「町家再生」にも丁寧にお書きいただいております。研究会としても初めてのことで、様々な問題が生じたこと記憶しておりますが、じっくりと丁寧な対応をされ、あれこれと発見があったことを楽しそうにお話しになっていたことが思い出されます。橋弁慶山の町会所再生はいろんな意味で記憶に残る再生事例でした。町家を再生することに対する現行の建築基準法との整合性を検討するために議論が重ねられました。また、町家の軒に水幕防火のための手動のドレンチャーを設置することも試みました。京都大学の建築の先生方が多く関わられた事例でもありました。残念ながら手動の水幕防火は認められませんでした。町家の防災に対し、問題提起がされ、解決方法を皆で議論、検討したことは今の活動にもつながっております。その要になっておられたのが大谷さんでした。

研究会の発足は望月、大谷両氏が両輪となって動きだし、町家という言葉すら一般化していないときにいち早く減少の一途をたどっている町家の危機感を打ち出されました。地道な活動でしたが、1軒ずつ丁寧に検討し、図面を広げながら皆で意見を出し合い、問題があるものについては、専門家を招きお話を伺うということを重ねてきました。1軒1軒の町家をそれぞれ丁寧に対応するという京町家再生研究会の活動の基本はこのときに培われたことです。忘れてはならないことだと思っております。

町家再生は今や京都では当たり前のこととなり、木造を再生するということが全国的にも広がりました。玉石混淆、様々な再生が行われています。これからもこの流れは続くことと思っておりますが、ひとつずつ丁寧に検証し再生の手法を考えるということをもう一度しっかりと見直したいと思っております。町家再生には防火、防災など現行の法規制との整合性や高齢化、維持管理など問題は沢山ありますが、近い将来、これらの解決策を見つけることが、いつも正面から町家と向き合い、取組んでこられた大谷さんの真摯な姿勢をずっと見続けてきた私たちの役割です。

大谷孝彦さんのご冥福をお祈り致します。

<小島富佐江（京町家再生研究会理事長）>

追悼◎大谷孝彦さんを偲ぶ

大谷孝彦さんの早過ぎるご逝去は残念でなりません。涙を堪え、心から哀悼の意を表します。6月7日に行われた「大谷孝彦さんを偲ぶ会」には、多くの関係者が集まり、穏やかな性格で誰からも慕われた大谷さんの面影を偲びました。それぞれが抱く思い出話に花が咲き、大谷さんの遺志を継いで、今後、京町家の保全・再生・利活用に一層の努力を重ねることを誓い合いました。

私は、再生研創設時のメンバーではありませんが、しばらくして活動に参加させていただき、爾来、20年を超えるお付き合いで、本当にいろいろなことがありました。どなたもが不思議がられるように、大谷さんと私はその性格が殆ど真逆でしたが、なぜか強い絆で結ばれ、再生研の活動、京町家ネットの活動を共に進めてきました。

創設後10年が過ぎ、初代会長の望月さんが勇退されることになり、次の会長を何方にお願いしようかと二人で相談し、京都大学の三村先生を口説きに行きました。しかし、先生は京都市景観・まちづくりセンター理事長になられるとのことで見事に断られました。外部からではなく幹事の中からという意見もあって、それでは大谷さんということ、2代目会長（すぐにNPO理事長）を引き受けていただき、私は補佐として支えていくことになりました。

京町家の保全・再生運動の理念を固く共有しながらも、具体的な活動方法については、穏健派の大谷さんと急進派（あるいは根源派）の私の考えは衝突することも多くあったのですが、実行に関しては大いに協力し合い、袂を分かつようなことはありませんでした。今になって考えれば、これも大谷さんの包容力の賜物であったと自戒しています。

思い出は尽きませんが、大谷さんも大好きだったワインに蘊蓄を傾ける会を作ることが出来なかったことが悔やまれます。お互い同年代で65歳を過ぎてから体調を崩すことが多くなり、実現できなかったことが真に残念で、悔やまれてなりません。

私は昨秋に事業の第一線から退き、真言宗系大学に聴講生として通って佛教を本格的に学ぶことに致しました。折に触れ、大谷さんのご冥福をお祈りして、拙いものではありますがお経をあげさせていただいております。

願以此功德 普及於一切
我等與衆生 皆共成佛道

<京極迪宏（京町家再生研究会理事）>

追悼●大谷さんの思い出

私が大谷孝彦さんと初めてお会いしたのは1999年12月初旬だった。実家の古家を改修したいと思い京都市景観まちづくりセンターへ相談に行ったところ、京町家作事組を紹介していただいた。京町家作事組事務局へはセンターの担当者が連絡をとってくださるということで、私はその足で東京へ戻った。それから数日後の夜、東京の自宅の電話が鳴り「京町家作事組の大谷と申します。今回貴家の設計担当となりましたので宜しくお願いいたします」という御挨拶をいただいた。電話のお声と律儀で丁寧なお話ぶりに好印象を持った。今度私が京都に帰った時に会って家を見たいということだった。

それから1週間ほどして私は再び京都へ帰ることとし、大谷さんと当時の京町家作事組副理事長で棟梁の堀内さんが家を見に来てくださった。お二人には私たち家族の暮らし方や勝手な要望をお話しし、また多くの質問をぶつけたが、「わかりました」「大丈夫です」というお返事が多く、心強いことこの上なかった。大谷さんは、とにかく一生懸命に私の話に耳を傾けてくださり、年末には改修のイメージ図面を3パターン描いてくださった。「お正月休みの間にご家族でゆっくりご検討ください」ということだった。

年が明け設計については何度も意見交換をしながらも春にはおおむね合意がみられた。見積書を持って来られた大谷さんは、なかなかそれを私の前に出されない。「高いと思われると思いますが・・・」と前置きが長い。その後ご自分の設計料の請求書を持って来られた時も同様で、こちらは何も言っていないのに「高いと思われると思いますが、決められていることなものですみません」とおっしゃって申し訳なさそうにそろそろ出される。「はい、わかりました」と言うと、本当に安堵されているのがよくわかった。

工事が始まり屋根の下は壁と柱と梁だけになった時、それはまるで火事の焼け跡のようだった。特に何十年もベニヤ板で覆われていた二階の土壁は煤が積み重なって真っ黒な上に埃が積もっていて、作業する人たちもできれば近寄りたくない触りたくない状態だったのだろう。何となく作業の進みがのんびりしていた。すると大谷さんがさきと二階へ上ってホウキを取り上げ、ものすごい勢いでその埃を払い始められた。「こうしてやらないと」と自らがお手本となって壁の埃

をおとされたのだ。もうもうと埃は舞うように大谷さんの頭の上に落ち、白いシャツもきれいなズボンも埃だらけ。その一部始終を見た私は大谷さんのいつもとは違う素早い行動に驚くとともに、この人を信じようと改めて思った。

煤で真っ黒の壁の埃がすべてきれいに取り払われた後何日かが経って、大谷さんから私と主人がその壁の前に呼ばれた。「この壁はまだ使えます。傷んだとこだけを補修すれば持ちますから、このままにしときましょう。ローマの古代遺跡も欠けている箇所だけを補修してありますけど、それでもおかしくないんです。ここも京都の町家の壁のあり方がとても良くわかるので是非とも残したいのです」と力説された。私と主人はそこまで訴えるようにお話ししていただかなくても、すぐに「はい、そうしましょう」と思ったのだが、あとで聞いたこととして私たちに話す前に京町家作事組の大工さんたちからは猛反対があったらしい。彼らを説得するのに大変な思いをされたということだったのだ（詳しくは「造景No35」p61参照）。

そして、工事もあと少しを残す頃、大谷さんはリビングダイニングの一面を京唐紙のパネルにしたいとおっしゃった。予算を抑えないといけないはずなのにどうして？と私と主人には寝耳に水的発想だったが、主人が「大谷さんの好きにしてもらおう」と言い皆で京唐紙を選びに行った。（棟梁は予算面から反対だったようで出来るだけ安価な柄を選んでほしいとこっそり私たちに懇願されていた）。今となっては、この部屋にこの京唐紙がないとどんな寂しい空間になっていただろうと思う。大谷さんのご提案には感謝している。

いつもいつも穏やかで柔和な笑みをたたえて人の話に耳を傾けられておられた大谷さんではあるが、本当に時々「ここだけは引き下がれない」という時だけは、びっくりするほど強気で頑固で興奮されてお顔が真っ赤で早口になられる「信念の人」だったように思われる。

まだまだ「信念の人」を続けていただきたかったのに残念でならない。

合掌。

<山田公子（京町家友の会会員）>



報告 ● 京町家友の会 活動報告

●総会

日時 平成27年4月26日(日) 12時から14時

場所 一久

大徳寺門前の精進料理一久にて総会を行いました。

西村吉右衛門会長の挨拶に引き続き、小島富佐江事務局長より第1号議案として事業報告を行いました。平成26年度は改修現場見学会や勉強会など、京町家再生研究会や作事組と連携して企画し、実際の町家改修にふれていただく機会を増やしました。通常の例会に加えて、楽町楽家、掘り出し物市も開催し、多くの方々にご参加いただきました。

第2号議案として、事業計画案を提示しました。今年度は昨年度1回しか行えなかった東京の例会も2回行う予定です。また昨年度実施できなかった「京町家かるた」を増刷する予定です。

第3号議案として、役員交代の提案がなされました。西村会長より交代の要望があり、新しくデービッド・アトキンソン氏の会長就任がはかられました。

いずれも拍手で承認され、新会長アトキンソン氏の挨拶がありました。京町家を購入し、作事組の協力でお返し、住むことになったいきさつをご紹介いただき、京町家を通じて京都を元気にしていきましょう、という意気込みが語られました。

●例会

総会に先立ち、大徳寺宗務総長様よりお許しをいただき、国宝の方丈と重要文化財の金毛閣を特別拝観いたしました。友の会第1号会員の真珠庵様のご案内で、歴史はもちろん、日常の様子などお寺ならではの話を伺いました。三門から京都市街地の眺めを楽しんだり、方丈ではゆっくりと静かに庭と向き合ったり、それぞれ思い思いの時間を過ごすことができました。



総会

●恒例！掘り出し物市 顛末記

日時 平成27年5月23日(土)、24日(日)

場所 釜座町町家

恒例となった掘り出し物市。多くの方々のご協力のもと、今回も大繁盛のうちに終了しました。前回から会員さん等、ご協力を頂いた方々への内覧会をまず開き、その後一般公開するという方式にしました。今回もありとあらゆるものが集まり、びっくりするやらおもしろいやら。さすが掘り出し物市でした。

開催が新聞で告知されると、かならずお電話があります。「私のところにも古いものがあるのですが…」多くはお年を召したご婦人からです。最近断捨離が当たり前になり、いろんなものを置いておくことがなんだかちょっと後ろめたいことになっています。でも「もったいない」というのは日本人、特に京都人の美徳。古いものが大切にしまわれていることは良いことだったはずですが、でももう自分のところでは使えなくなってしまったので、どなたかに使ってほしい。それが掘り出し物市のメインテーマ。あつまってきたものたちはこのお気持ちがつまっているので、粗末にしたらばちがあたります。次で大切に使用いただけるように「後継者」を見つけるのも私たちの役目だと思うのですが。あれやこれ、いろんな人がこられます。ときどき腹を立てたり、納得したり、売り手の方も良い勉強をさせていただいています。

開催中も終わってからも「次はいつですか？」というお問い合わせがあります。当分はやめられないかなあと覚悟をしています。

いろんな出会いがあり、町家のご相談も飛び込んできます。たんなる「市」ではなく「出会いの市」だと感じていますので、これが続けられるおおきな原動力かもしれません。

次は「冬期 掘り出し物市」、乞うご期待。



掘り出し物市

改修事例◎江戸末期の町家の改修工事

上京区/田中邸

設計：冨家建築設計事務所/施工：アラキ工務店

田中邸は千本通を東に下立売に入った一筋目の北西角に位置し、東西にはしる下立売通りはかつて賑やかな商店街であった面影を残している。

田中邸の位置する出水学区は、平安京内裏の「仁寿殿・紫宸殿・清涼殿・綾綺殿・承明門」などの跡地で、本建物の下立売通りを挟んだ南向きには「史跡：内裏内郭回廊跡」がある。近世の聚楽第遺構では南外堀跡があり、本建物敷地北は周囲より地盤が下がっている。寛永14年の洛中絵図には「田中丁」とあり、町家は下立売通りの北側にみえ、その北は神明町まで野畑であった。町名は家が建ち始めた頃、周囲が耕地であったことによるという。蛤御門の変では長州藩児玉隊が下立売通りを東進し蛤御門へ向かっているなど、歴史的事件にも登場する。またその後の「鉄砲焼け」当時の瓦版によると田中町はかろうじて出火範囲に含まれておらず、当時から建築物を残している可能性が高い地域でもある。近代には商店街化、各種小売業などが賑わっていた、田中家敷地東側に接する北へ向かう路も商店街であったと聞き、その名残の電灯の金属部分が通りの上に残っている。

現時点で建築年代を特定できる資料はないが、旧土地台帳では大正8年12月5日に田中菊之助氏が所有権移転登記されていることがわかる。口伝では当時既に建っていた建物を購入したと伝わっており、建物様式の特徴でも江戸末期から明治初期が建築年代かと思われる。2階の階高が低くムシコ窓も備わっていない、1階の階高も決して高くない。柱寸も細く、すべてが角柱という訳でもなく、解体調査時に柱勝で母屋が付いており、ウダツがあった可能性が高い。2階の梁、胴差のわたし方、大黒小黒と梁の関係など明治期では一般的と思われる構造形態ではないのが特徴である。大正8年当時から昭和20年頃まで田中家は石屋を営み、屋号「石菊」で石碑や

鳥居の作をしていた。戦後、昭和26年頃には食料品店を営み始めている。昭和28年に2階の改装をした。昭和52年頃に食料品店も閉店し、昭和末頃には建物の姿は改修前の様子となっている。平成25年に田中喜代野（92歳）氏が亡くなられて、現在に至る。

本建物は木造ツシ2階建、平入り切妻造、棧瓦葺（一部金属葺）、間口3間、奥行5間、続いて北にトイレ棟が附属する。前面道路の北側に南向きに接する。

外観は軒庇が板金葺に変わっているものを瓦葺に戻し、下がっていた軒庇も締め直した。石屋をしていた大正期の雰囲気を残して、1階部分は玄関側一部にオープンな土間としている。東妻面は焼杉板を張り直した。

階高が低く抑えられている、ツシ部分の壁面は半間ごとに東がたち真壁漆喰塗りとなっているものを残して改修した。

1階平面は2列3室型の変則で、南から表土間が間口いっぱい奥行2間あったものを6対4程の割合で表の間と土間とに分けて居室をつくり、通庭（ハシリ）には、FLより一段低い床をつくった。表の間の天井は大和天井と吹抜けの混合とした。また座敷は間取りの改変が行われていたものを本来の姿の八畳間に復元した。座敷には小さいながらも書院窓付の奥行き浅い床の間が付いていたが、今回広縁側に収納を設けたため、フェイクの書院窓とした。

ファサードは明治期と大正期の混合の意匠として復元し、内部は建物を取得された大正期に近い間取りに直した。

今回の改修工事により、今後は喜代野氏の子孫、田中家が集まる場所として整備し、またかつての石屋であった面影も再生し活用していく予定である。

<冨家裕久（京町家作事組理事）>



ファサード



側面



床の間

シリーズ「町家改修設計の勘どころ」その6 ◎ 「町家の調査と現況図と撤去図」

◎調査

町家改修のプロセスで例外なく行われるのが実測調査です。現況図を作成するのに必要な平面寸法、断面寸法、部材寸法、不陸、倒れ等を測っていき、屋根の雨漏り、床下の換気状態、柱梁の腐朽、蟻害、既設の設備配管配線、隣家との取り合い、すでに著しく手が加えられている町家であれば元の姿の考察に必要な情報など、町家の状態を評価するのに必要な調査を行います。

当然の話ですが現況図と建物の状態評価を間違えば必ず工事の見積りに影響します。図面は見積りをするためのものです。設計図の中では一見目立たない現況図と建物の状態評価が重要になってきます。間取りの寸法、天井高さ、床高さ、桁高さ、屋根の勾配などによって土壁の塗り替え範囲や外壁、造作、仕上げ工事の範囲が決まります。また、状態評価により屋根の葺き替え、揚げ前、根継、イガミ突き、延べ石、一つ石などの改修の必要性や数量が出てきます。

技術者は町家の現況図と建物の状態を照らし合わせてお施主様にしっかりと説明しなければならぬし、お施主様にはその部分をしっかりと把握された上で改修計画や予算計画をたてて頂きたいと思えます。同じ規模の町家で改修後の姿が一見同じであっても既存の状態によって費用は変わってきますので、その費用の内容は一体何であるのかを把握されるためにも、改修後のプランや仕上げ材や設備ばかりでなく、現状のどこが悪く、どの範囲を撤去し、どの部分を直さなければならないのかにも目を向けていただき、見積りの根拠となる現況図、撤去図から、改修後には無くなり、あるいは見えなくなる部分にも注目して頂ければと思います。

◎現況図

まず基本的に必要となる現況図は平面図と断面図です。立面図については平面寸法と断面寸法が分かれば自動的に壁や建具の範囲が積算できるので、助成金申請に必要な場合や、大きく外観が変わる場合などを除き、不要だと思います。

現況平面図に必要な情報としては基本的に先ほど挙げた平面寸法や不陸、倒れ、敷地境界線、前面道路、工事にかかわる隣家の情報などがあります。各室の床面積を算出することのできる柱芯寸法が記載されていれば基本的によく、柱やその他の造作材の細かい部材は実寸で図面にかかれていれば寸法値の記載は特に必要ありません。間取寸法について少し注意すると、例えば一間の幅の部屋があった場合、柱の芯から芯が実測値で2,012mmと測れても柱が100角であれば京間の畳寸法の1,910mmを足して2,010mm(110角なら2,020、120角なら2,030という具合)となるので図面では2,010mmと記載されます。実測値だけでは建物の倒れや木材の収縮などに影響されるので町家の寸法をしっかりと理解する必要があります。

現況断面図は町家のトオリニワの通りと部屋の通りの床高さ、階高さ、桁高さ、天井高さが把握できる寸法を記載していきます。平面図と同様に梁、桁、胴差、ササラ、ヒトミ梁、その他の造作材等は、実寸で図面にかかれていれば部材寸法を記す必要はありません。断面図は建物の表側と裏側の矩計を実測の際にしっかりとおさえておけば後は屋根の勾配と棟の位置で自動的におさすことができます。桁方向の断面に関しては断面情報としては特段必要ないでしょう。断面で少し注意が必要なのは桁高さを測る際に軒

先の納まりが垂木を出桁と腕木で支えるカシキ造りである場合、目視で下から見える桁らしき横材は腕木を受けるための材であって、その上に本物の桁があるので騙されない様にする事です。お座敷側では縁側がある場合、化粧軒裏になっていることが多いのでここでも化粧垂木の上にある野桁や桔木等の三角納まりに注意しましょう。

昭和初期型とそれ以前の町家の違いについてもしっかりと把握しておく必要があります。昭和初期型では足元の土台、側壁を1、2階、小屋で分断する胴差、妻梁、火打梁などが登場してきます。それらの違いも含め、町家全体の軸組み、寸法体系を把握することで実測が効率よく行え、現況図も手間が掛からず作成する事ができると思えます。

断面の実測や作図については技術者の話ですが、お施主様の立場からすると改修の計画中はつい平面プランだけで話や考えを進めてしまうかもしれません。しかし建物の全体を把握するためには断面図(矩計図)が一番重要になってきますのでプランをお考えの際はぜひ建物の「高さ」にも注目して頂ければと思います。

◎撤去図

次に撤去図についてです。工事に着手した際に仮設や養生を別にして一番はじめに掛かる作業が撤去工事です。見積書にも工事項目としてはじめにあります。

撤去図では既存の内外装材、例えば室内に貼られている合板や畳、建具や造作材、設備機器などの撤去範囲や箇所を示し、外部では外壁材や屋根材(瓦のみか下地材共か)、不要になる物干し台や植栽、塀などの撤去範囲を示していきます。撤去図に示された内容によって撤去に掛かる手間や廃材の数量、運搬費、処分費がでてきます。

見積りのため必要になると同時に現場で作業をする施工者が何を撤去し何を残すのかを判断するためにも必要になってきます。逆に撤去図がなければ改修図だけで撤去か存置かの判断をしなければならず、混乱する恐れがあります。再利用するつもりものを誤って処分するといった事態を防ぐためにも、改修後には無くなるものを明示する根拠資料として撤去図が必要になってきます。地味ではありますが重要です。

◎おわり

大雑把ではありますが、今回は図面の中でもあまり目立たない現況図と撤去図、その元となる現地調査についてお話させて頂きました。技術者にとっては当たり前の話ばかりで恐縮ですが、今後町家の改修をお考えの方や計画中の方には例えばご自身で町家の間取りをスケッチされたり、不具合のある部分を調べられたり、設計者に依頼をされる際などに参考にして頂ければ幸いです。

(聞き手：作事組事務局 森珠恵)

設計士プロフィール
井澤弘隆



2007年～2008年 第2期棟梁塾に参加。
2009年 京都造形芸術大学地域デザイン専攻卒業。
同年、株式会社中村設計入社。
おもに寺院の改修・新築工事の設計監理を担当。
2014年～京町家作事組 設計担当理事。

interview — 京町家に移り住んで ● **ダイモンナオ邸**

京都市上京にお住いのイラストレーターをされております「ダイモンナオ」様宅にインタビューに行きました。

＜聞き手：株式会社高永 高橋久永＞

●町家に住むことになったきっかけ

私は大学時代から結婚して東京に引っ越すまでの約8年間を京都で過ごしました。東京方面に居住していた間もいつかまた京都に戻りたいと考えており、まだ京都に移住する計画もない時から京都の物件情報をよく検索しては見ておりました。新築一軒家からマンション、中古物件まで様々な物件を探していると、たまに町家のリノベーションされた物件が検索に掛かり、そんな選択肢もあるのかとぼんやりとは考えておりました。ただ、「町家なんて高いだろうな」とか「暮らし方が難しそう」と思い、自分には関係ないだろうと感じていました。ようやく5年前に家族で京都に転居することが決まり、本格的に住居探しを始めたのですが、その時点では中古物件を購入・リノベーションして暮らそうということだけは決めての物件探しでした。そして、不動産屋さんに行くか物件を見せて頂いている間に、町家という選択肢がそれほどハードルの高いものではないのかもしれないと感じるようになってきました。歴史のある古いものを活かして、心地のよい生活ができるのではないかと考えはじめ、そこから町家に限定して家探しを始めたのがきっかけでした。

●町家に住み始めて感じたこと。

改修工事が始まる前の古い町家の購入を決めるときは正直不安でした。本当にこれが快適に住めるように生まれ変わることができるのだろうか。しかし、何度も何度も町家の設計士さんと打ち合わせをしているうちに、町家の良さを少しずつ学ぶこともできました。数ヶ月後、改修工事で本当に見違えるほどに素敵な空間に仕上げられました。転居前は、神奈川の新築分譲マンションに暮らしていましたが、便利ではありつつ、何か物足りないと感じておりました。マンションの無機質で密閉された空間に暮らしていた頃と比べて、この町家自体の空気の流れを感じて（隙間風が入ってくるとかそういうことではなく）、いい空間に暮らさせて頂いているなとつくづく思います。春・秋の気候のよいときはもちろんのこと、夏も1階にいと涼しいので、真夏の間は寝る場所を2階の寝室から1階の和室にすることが例年の恒例になっています。冬は2階が暖かいので、寝るときもロフトにあるアトリエも想像していたよりも快適に過ごせています。

●マイナス面は。

自宅の町家は織屋造という構造で、吹き抜けが大きく取られているので、とても開放感があり気に入っているのですが、冬の温めた空気は全部上に上がってしまいます。家の中で、一番開放感のあるキッチン・ダイニングの空間が冬は他の部屋と比べると、どうしても寒くなってしまうのが欠点でしょうか。そのため、冬は天井の低い部屋である1階の中の間や和室を締め切って、そこにいる時間が長いです。仕切った部屋はストーブ

などで部屋がとても暖かくなるので、さほどの問題ではないのですが、冬の間だけは一番のお気に入りの吹き抜けのダイニング空間を活用しきれないのが少し残念なところだと思います。

●5年住んでのまとめ。

うちの町家は全ての床材を天然の無垢材にしてもらい、クロスも一切使わず漆喰や土壁、もしくは木材で壁も天井も作って頂いたことに、心より感謝しています。自然の素材のものは、湿度の調整や消臭の役目があるとはお聞きしていましたが、本当にそうだなと実感しております。マンションの時のような快適さには欠けるとは思いますが、木や土の素材感を日々感じながら気持ちよく暮らすことのできる今の町家での生活に満足しております。

構造的には古いもののよさを活かしつつ、現代人のライフスタイルに合わせて改修しながら住み継ぐことのできる町家という建物をすごいなと思います。また縁があって、ここに住まわせて頂いていることに感謝の気持ちを忘れず、丁寧に暮らしていきたいと思えます。



●事務局覚え書き

今まで京町家情報センターでは、京町家物件をお探しの方には一人ひとり一度直接お会いしてお話をお聞きし、ユーザー登録（年会費2000円）をしていただいております。設立当初は、不動産業者でも京町家とはどういう建物を言うのか判断が出来ない状況から始まりましたこともあり、ユーザーの皆様にも京町家についての色々を説明すること、疑問にお応えすることも目的としていました。ですが、近年はユーザーの方々の京町家の理解も深まり、さらにインターネットの普及により、京町家のニーズもますます高くなっています。そこで京町家情報センターも物件情報流通の問題点を改善し、情報のスピードに対応すべく検討しております。もうしばらくしますと、京町家物件情報も新規にHPを作成し、一般に広く公開することとなります（現在新HP作成中）。ユーザー登録もHP上で可能になり、無料化することになりますと思えます。新規HP運用となりましたら、改めてご案内します。

（京町家情報センター事務局 城幸央）

オーナー登録数：延 207
ユーザー登録数：延 1307
物件登録数：延 1412
成約件数：延 187 (2015年6月10日現在)